



# 石川県立美術館



■開館時間  
展示室:9:30～17:00(季節により開館時間が変わる場合があります)  
■休館日と展示室閉室日  
美術館全体は年中無休  
展示室は展示替え期間と年末年始に閉室  
※詳しくはホームページなどから展覧会スケジュールをご覧ください。

■観覧料  
●2階展示室(コレクション展示室 第1～第6と前田育徳会尊経閣文庫分館)  
一般350円(20名以上280円)・大学生280円(20名以上220円)・高校生以下無料・65歳以上280円(国民の祝日は無料)  
※毎月第一月曜日は無料  
●1階展示室(企画展示室 第7～第9)は展覧会ごとの料金となります。

石川県金沢市出羽町2-1 TEL(076)231-7580

<交通案内>

金沢駅北陸鉄道バスターミナル

●東口3番乗り場「城下町かなざわ周遊号」広坂(石浦神社前)下車徒歩5分/橋場町・兼六園下経由の各バスで出羽町下車徒歩5分 ●東口10番乗り場香林坊・本多町経由の各バスで広坂(石浦神社前)下車徒歩5分 ●西口4番乗り場から10金沢学院大学、金沢東高校、東部車庫行きの各バスで広坂(石浦神社前)下車徒歩5分

石川県は藩政期より美術工芸の盛んな地として知られ、伝統的に高い水準が保たれています。また作家活動も盛んで県民の美術文化に寄せる関心も極めて高いものがあります。石川県立美術館はその美術工芸の姿を紹介することを目的に設立されました。加賀藩以来受け継がれる石川県の芸術的個性を活かした、地方色豊かな美術館を基本理念として運営しています。

金沢市中心部、日本三名園として名高い特別名勝兼六園に隣接しており、近隣の県立歴史博物館、成巽閣、本多蔵品館、しいのき迎賓館や金沢21世紀美術館などとともに「兼六園周辺文化の森」の名前にふさわしい環境を形成しています。

設立は昭和34年にさかのぼります。当初は石川県美術館の名で、野々村仁清作国宝「色絵雄香炉」を常時公開し、古九谷や茶道具、工芸品等を展示してきました。その当時の建物は今日も残っており、石川県立伝統産業工芸館として活用されています。

こうして石川県美術館は、長い間県内の文化財保存施設の中心として重要な役割を果たし、また、多くの展覧会を通じて美術鑑賞の場を提供してきました。しかし大型化、多様化する展覧会に対応することが困難となってきたことから、機能、設備、規模をさらに高めた新しい美術館の設立ということで、昭和58年11月13日に現在の地に移転し、石川県立美術館と名称を改め、今日に至っています。

開館から20年余りを経過した平成19年、大規模な改修を行いました。建物の構造はそのままに、電気・空調設備を更新、その工事には13ヶ月を要し、翌20年9月にリニューアルオープンしました。館内のロビー・通路を明るくし、正面玄関から展示フロアに向かう階段に上り・下りのエスカレーターを取り付けました。また1・2階の展示室を結ぶエレベータも新設するなど、体の不自由な方にも便利に使っていただけるよう生まれ変わりました。



## 金銀象嵌草花文鳥籠置物

初代山川孝次 19世紀 明治  
径20.8cm×高23.5cm

ほぼ等身大の鶉を籠に入れ、羽毛に施した毛彫りなどすばらしい彫り技をみせている。籠の下部金具に金、銀などの象嵌で、薄、萩、桔梗を施し、情趣を盛り上げている。単なる鶉の置物ではなく、餌入れをつけ、籠を開けられるようにし、そして鶉を入れた鳥籠の置物であり、写実を徹底させた明治の時代性を良く表している作品である。

平成23年3月末現在、所蔵作品は3,089点。うち工芸品は1,543点とほぼ半数を占めています。文化財保護法制定以来、21名の重要無形文化財保持者(人間国宝)が石川県から生まれており、現在も銅鑼の魚住為楽、彫金の中川衛をはじめ、陶芸・漆芸・染織・木工の分野に9名の方が活躍中です。明治期に始まる近現代部門の作家の工芸作品は、2階コレクション展示エリアの第5展示室で、毎月々に展示替えを行いながら公開されています。

今日に続く工芸技術の基は、前田家の保護のもとで江戸時代前期に確立されました。武器武具の修理所であった「御細工所」を大名調度の製作や修理の場とし、京都や江戸から名工職人が招かれて、その高度な技能により御細工所の職人を指導していきました。その結果、他藩に例を見ないかたちで加賀藩の伝統工芸のわざの基盤が確立されていくことになりました。ここで製作されたのが加賀象嵌であり、加賀蒔絵で



## 象嵌籠銀花器「岑寂樹林」

中川 衛 2001年  
幅38cm×奥行21cm×高19cm

籠銀を素材として鑄造し、その表面を加賀象嵌技法で加飾した花器である。中心部が近い山で、周辺部の遠い山へと広がっていく。また、表面全体に、一本を三カ所、六本を三カ所に配し、山と重なる部分は金で、その他の部分は銀で施された線象嵌は霞を表現し、作品に広がりを与えている。山の部分は、金、銀、赤銅、四歩一を用い、それぞれ上下の段でその分量を変えて、遠近感を表している。山のなかの唐松林にも材質と分量に工夫がなされている。そしてそれぞれ重ねて象嵌する鎧象嵌の技法が駆使されている。風景を題材にし、デザイン化して現代的な感覚でまとめ上げた作品である。

した。町方での生産による加賀友禅とあわせ、この時代の工芸を代表するものとなりました。中でも加賀象嵌は「象嵌籠」としてその技術や意匠が高く評価され、加賀藩の特産物として全国に移出されました。第2展示室では、これらのほか茶の湯釜など古美術品の数々を毎月のテーマに合わせ、古九谷とともに展示しています。

加賀百万石の前田家が収集し、また育成して今日に残る文化財は、前田育徳会尊経閣文庫分館で公開されています。後藤家歴代の装剣小道具のほか、年に一度、重要文化財の「百工比照」が展示されています。紙類、金色類、色漆類、金具類など、13箱に2,000点以上といわれる資料が残されており、それを整理分類したもので、毎年その一部を公開していますが、中には現在、絶えてしまった技術もあり、貴重な資料として今日に伝えられています。

〈石川県立美術館普及課長 谷口 出〉